

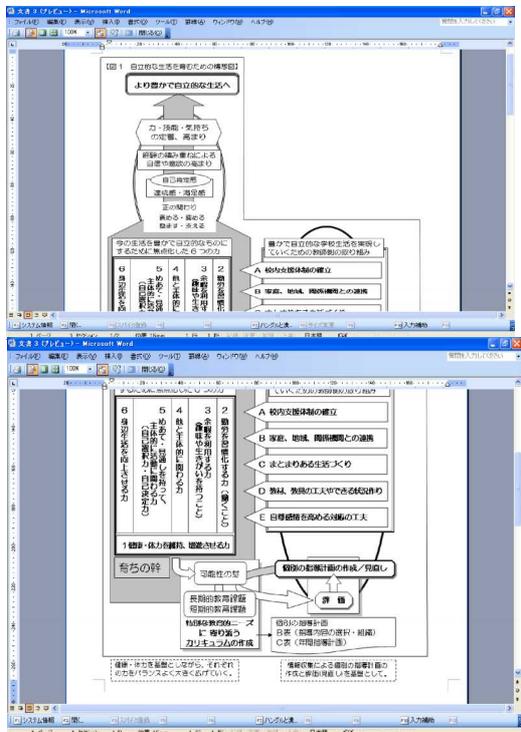
特別支援教育研究委員会

1 研究テーマ

一人ひとりの生活を豊かにし、自立する力を育てる支援のあり方

～通常の学級で学習する、特別なニーズを持つ児童への支援～

2 研究課題



「特別な教育的ニーズを持った児童生徒への支援のあり方」として、図のような「自立的な生活を育むための構想図」を作成し、学校生活での学習・生活場面における教師の支援のあり方について研究を進めた。委員会で考えた構想図の実証的実証を行えるよう、「自立する力」をより鋭角的に捉えようと考えた。具体的には 特別な教育的ニーズに寄り添うカリキュラムの作成を位置づけた点、 教師側の取り組みは「個別の指導計画」の作成 評価 見直しの循環を基盤とすることを意識した点、 また、取り組みの柱に「自尊感情を高める対応の工夫」を盛り込み明確化した点である。より豊かで自立した生活を送るために焦点化した6つの力と、その力を伸ばし、育むための環境へ働きかける教師側の5つの課題を明確にすることで、個の特別な教育的ニーズに寄り添ったカリキュラムの作成が焦点的に行えると考えた。

現在進められている特別支援教育は、自律学級に籍を置く児童生徒だけでなく、特別な教育的ニーズを持つすべての児童生徒に適用されるものであるという立場でとらえていくことが必要である。その場合、通常学級と自律学級の連携がより綿密に要求されるという点において、校内の支援体制の充実が課題となると考える。研究校の旭ヶ丘小学校では、このようにとらえに立ち、 教師間の連携を大切に、児童のニーズの明確化と、支援の具体の明確化を行う。

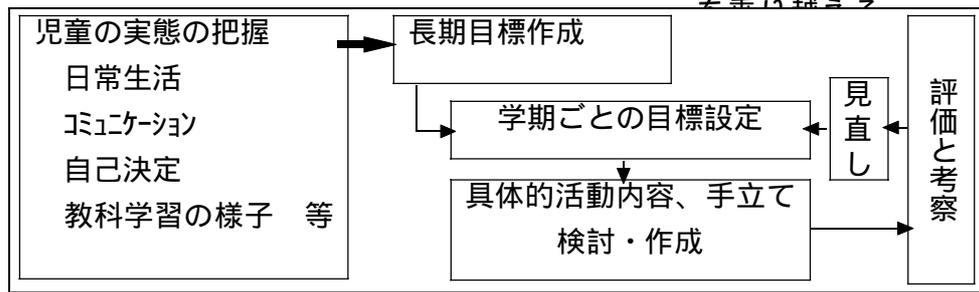
つまずきや困る姿をどのように乗り越え、自己有用感を高めたか日々の姿を追う。 児童の特性を理解した教材化の工夫や、学習の場の工夫を行う。という課題を持ち、支援のあり方を研究した。

3 指導の実際

(1) 子どものニーズのとりえ〔*構想図...個別の指導計画の作成/見直し〕

研究校では、特別なニーズを持つ児童への支援について、構想図における「個別の指導計画」の作成 実施 評価 見直し の部分に力を入れ、子どものニーズと支援の方法をとらえていった。

具体的には以下の通りであるが、特筆すべきは、学期ごとに評価検討を行っている点と、ニーズの
とらえを、自律学級と原学級の両面から行った点であった。つまり、教師間の連携を大切にすること
による児童のニーズの明確化であった。それにより、単元を通して予想されるつまずきと、それ



ためにどのような支援
有効か検討し、手立てを
もって想定して単元を
開いていった。

(2) 学級間の連携〔* 構想図...校内支援体制の確立〕

交流学習に関わる自律学級からの指導内容と原学級担任からの願いを明確にして、両者の接点をすり合わせる中でカリキュラムの立案を行うようにしていった。

教科	原学級での授業の指導内容	原学級担任の願い
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・観察、実験、栽培などを通して、教師や友達と関わる。 ・教師や友達の活動を模倣しながら、観察や実験の活動をする中で、自分なりの発見や気づきを持つ。 《自律学級での活動》 ・栽培活動(野菜) ・理科遊び(ペットボトルロケットなど) 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験や栽培などの活動は、教師と1対1で行うより、集団の中で友達と関わることで様々な発見をすることができる。 ・他の児童のすることを模倣しながら自分もできる。 ・一人ではできない実験ができる。 ・実験結果が、具体的に変化をし、わかりやすい。 ・比較が現実的にできる。

例

交流学習への支援の原則を確認しあい、支援を進めていった。

原学級との連携の原則を確認しあい、支援を進めていった。

(3) 指導観の設定〔* 構想図...自尊感情を高めるための対応の工夫〕

〔* 構想図...教材・教具の工夫やできる状況作り〕

上記の支援や連携の原則を踏まえながら、「特別な支援を要する児童」に対しての指導の方向を明らかにするよう、各教科で「指導観」を明確にし、単元の中での支援のあり方の規準としたり、授業後の評価に役立てるように試みた。そして、指導観を明らかにすることは、「できた」「認められた」という自尊感情を持たせるためにも、不可欠な視点であった。

指示や説明を極力端的に行う。	感じたことを一緒に分かち合っていく。
必ず具体物を示して説明する。	本人のつぶやきや気づきを残しておく手立てを用意しておく。
全体説明の後、必ず個別に内容の確認を行う。	実験・観察において「どこを見ればよいのか」視点を明確にする。
事前に道具一式は教卓に用意しておく。	授業の終わりに、本時のまとめと次時の予告をする。
実験の準備や内容を班で役割化し、自分のやることを明確にする。	

また、指導観を規準とし、個の実態に合わせた指導や支援の方法を取り入れたこと(例えば、の指導観を受け、気づきやまとめ方に対し、その子の代弁として「付箋」をノートに貼って示してやる)で授業への意識を明確にし、見通しを持って授業に取り組むことができた。それにより、主体的に学習にかかわり、自己決定する中で、原学級での授業に参加する姿勢も養われていった。

4 この事例から明らかになったこと

- ・ 構想図の中で、「教材教具の工夫やできる状況づくり」「自尊感情を高める指導の工夫」に対し、個の実態に対応する「指導観」を設定することで、単元や生活全体での支援の方向を明確にできた。
- ・ 通常の学級と自律学級の連携を密にし、通常学級の担任が個の特性や障害を十分に把握し指導計画

を作成したり、自律学級で予備、補充学習を行ったりする事で円滑な学習の場作りが可能となった。

5 来年度への課題

- ・ 研究校だけでなく、各委員が実践を持ち寄り、構想図の検証、見直し、修正をしていく。また、「6つの力」を育成していくためにそれぞれの手立てが見えてくるような研究にしていく。
- ・ 6つの力の手立てと関わり、1つの力を、1年間の教育課程の中で諸教科諸単元と関連付け、「力の育ち」を目的としたカリキュラム（またはC表）の作成をする。
- ・ 特別支援教育は個の実態に合わせた支援が中核となり、カリキュラムの体系化や、自己評価、授業評価、カリキュラム評価が行いにくいのが、委員会としての擦り合わせを進めていく。